

「教育臨床総合研究紀要 4 2005研究」

1 年次における学校教育実習カリキュラムの企画と実施、その改善

—— 学校教育実践研究 ・ 学校教育実習 のカリキュラム構築とその実際を通して ——

An Improvement of Student-Teaching Program for Freshman.

川 路 澄 人 [*]	平 野 俊 英 ^{**}
Sumito KAWAJI	Toshihide HIRANO
森 本 直 人 ^{***}	秦 光 司 ^{****}
Naoto MORIMOTO	Kouji HATA
高 旗 浩 志 ^{*****}	間 瀬 茂 夫 ^{*****}
Hiroshi TAKAHATA	Shigeo MASE

はじめに

島根大学教育学部は平成16年度より教員養成に特化した学部として改組された。学部改組の特色として「1000時間体験」の必修化、入学半年後の主・副専攻選択制があげられる。「1000時間体験」は3つの領域に分かれ、「教育基礎体験」「心理臨床・カウンセリング体験」「学校教育体験」で構成される。本稿においては「1000時間体験」の中でも「学校教育体験領域」についてその企画・立案・運営などについて詳述する。「1000時間体験」の概要については別稿に任せ、本稿では1年次に実施する「学校教育実践研究 ・ 学校教育実習」の企画段階での検討した内容とその実施、実施後における附属学校園の教職員へのアンケート結果の分析と来年度（平成17年度）における「学校教育実践研究 ・ 学校教育実習」の改善案を提案するものである。

旧カリキュラムの問題点と「学校教育体験」のコンセプトづくり

「学校教育体験領域」は基本的に、附属学校園を活用した「教育実習」の体験として構想を始めた。その前段階において筆者たちの共通理解として、以下のような旧カリキュラムにおけ

* 島根大学教育学部初等教育開発講座

** 島根大学教育学部初等教育開発講座

*** 島根大学教育学部附属教育支援センター

**** 島根大学教育学部附属教育支援センター

***** 島根大学教育学部初等教育開発講座

***** 島根大学教育学部初等教育開発講座

る改善すべき問題点があった。

旧カリキュラムでは2～3年次において「教育実習」を実施していたが、教員養成に特化した学部として1～4年次にわたる連続的・継続的な「教育実習」カリキュラムの強化が必要である。特に旧カリキュラムにおいては教職への「めざまし体験活動」として「教育実地研究」を2年次に実施しており、大学入学時という教職志向の高い時期における「学校体験活動」が準備されていなかった。またほとんどの実習（2、3年次）がイベント的、通過儀礼的なものと学生に受け取られ、教職志向や教職スキルを高める機会としての効果が減退していた。

旧カリキュラムにおいては附属学校園以外の松江市内の複数の協力校（幼稚園・小学校・中学校）において副免教育実習（4年次）の実習を行っていた。これまでも附属学校園があるにもかかわらず、協力校で実施する事への疑問が協力校側から出されていたこと、教育実習の担当に関わる予算的（講師謝金）措置が今後不明になることを要因として附属学校園で実施することが妥当である。また附属学校園の存在意義の一つとして教育実習を担当することもあり、学部と協力した教育実習の在り方について検討する素地があった。

以上のような問題点を克服するために「1000時間体験」における「学校教育体験」（380時間）のコンセプトを以下のように考えた。

学校を場とする「教育実践」や「教科（保育）指導」における資質向上に焦点化した「学校教育実習」として構想する。

従前にもまして体系性及び段階を重視し、学部1年次から4年次までの継続的な資質向上を目指す。

附属学校園を場とする「学校教育実習」の特段の拡充を図る。

授業実践を構成する諸要素（学習者・学級理解、教職理解、教材・カリキュラム理解、授業パフォーマンスの洗練等）に対応するとともに、それらを統合しうる教育実習として構想する。

従来の「イベントとしての教育実習」から、学校との恒常的・継続的なかわりを重視する「インターンシップとしての教育実習」として構想する。

「コア科目」との連動を重視し、大学の講義・演習と教育実習との有機的な連携を図り、学生が理論と実践とを意図的に往還しうることをめざす。

「副専攻制」に基づき、希望する学生には複数校種の免許取得が可能であり、また校種を限定することによる深化型の実習も履修できるような教育実習体系を構築する。

これらのコンセプトをもとに4年間の「学校教育実習」の体系を構築したわけであるが、これらの「学校教育実習」は年次進行で開講されていく。次章においては平成16年度、つまり改組初年度における新入生（1年生）に対して実施した「学校教育実習」とその「コア科目」である「学校教育実践研究」の内容について報告する。

「学校教育実践研究 ・ 学校教育実習 」の概要

1. 目的

「学校教育実践研究 」及び「学校教育実習 」は、学部1年生を対象とし、教職への志向を育む最初のカリキュラムとして位置付けるものである。このカリキュラムでは、1. 幼稚園児から中学生までの「子ども」の成長及び発達を総体として理解し、2. 学校で日々行われる「授業」を見る事と記録に取る事をスキルとして学習、3. 学生間の協同作業を通して学生自身の教職志向に係るリフレクションを図るとともに、4. 他者と向き合う際のパフォーマンス及びプレゼンテーション・スキルを磨くことを目的とする。

2. 開講・運営主体

従来の教育実地研究運営委員会が廃止され、新設された附属教育支援センター（教育実践・実習開発センター）がこれら「学校教育体験」の開講主体となる。運営は学部教育支援センターに設置する教育実践・実習開発センター専任及び学校教育体験領域専門部会を中心に行う。

3. 開講期及び時間数の認定等

「学校教育実践研究 」は1年次通年で実施となっているが、今年度は前期水曜日：5・6時限に15回実施し、30時間を認定する。また「学校教育実習 」は1年次前期に集中開講し一日4時間で5日間実施することにより、20時間を認定する。

4. 「学校教育実践研究 」・「学校教育実習 」の「学校教育体験領域（380時間）における位置づけ

- ・教科の枠組みからではなく、子どもを発達の総体としてとらえる。
- ・学校教育を子どもの発達全体に関わる営みであること理解する。
- ・その上で、各発達段階における子どもの特徴、学校教育の特徴を理解する。
- ・子どもに関わるための基本的な構え、スキルを身につける。
- ・自分の教師としての特性を知り、伸ばす。

5. 「学校教育実習 」の内容

- ・内容：附属学校園を場とし、幼稚園（1日）、小学校（2日）、中学校（2日）各4時間の計5日間（20時間）の観察参加実習。
- ・期間：2004年6月30日（水）～7月6日（火）
- ・実施方法：新入生196名を学生番号（音楽・美術・体育は細分）により5クラス（A～E）に分け、このクラスを核とした運営を行う（1クラスあたり40名程度）。
- ・下記表2のようなローテーションを組み、8時30分～13時ごろまでの間、各学級に配当し授業（保育）観察と児童・生徒とのコミュニケーションを図る。

表1 2004年度「学校教育実践研究」のプログラム

	月日	内 容	担 当 者	宿 題	教室	備 考
0	4/14	1000時間体験のオリエンテーション	MO/HA	自己紹介スピーチ(1分間)	38	
1	4/21	学校教育実践研究のオリエンテーション ポートフォリオの説明 グループで自己紹介スピーチ1(1分間)	MO/HA /K/M/TK/H	小学校低学年・高学年・中学生向けの自己紹介スピーチ	38	名簿準備 クラスごとに 着席
2	4/28	グループでの自己紹介スピーチ2	MO/HA /K/M/TK/H	教育学部を受験した理由、 心に残っている授業	5つ	・各グループ、 チーム代表決定
3	5/19	授業観察1(道徳) 自由記述とS-T法	権藤/K	心に残っている国語の授業	38	
4	5/26	授業観察2(国語) 記録をもとに教官による授業協議	MO/HA /K/M/TK/H	教官による授業協議を聞いて、 自分のとらえ方、考え 方と異なる点や新たに気づ いたことをまとめる	38	写真1
5	6/2	授業観察3 学生間による授業協議(10人程度)	MO/HA /K/M/TK/H	自分たちで行った授業協議 の中で、自分のとらえ方、 考え方と異なる点や新たに 気づいたことをまとめる (各A41枚、ワープロが 望ましい)	38	
6	6/9	授業観察4(幼稚園・生活科) 個別活動を記録する	田中/HA/K	S-T法との違いをまとめて みよう 「附属中学校からの宿題」 (もし...な場合、あなたは どうしますか?)	38	
7	6/16	附属によるオリエンテーション1 (附属中学校) 教師のマナー	附属中学校実 習部 K	附属中学校の話聞いての 感想 「附属小学校・幼稚園から の宿題」(もし...な場合、 あなたはどうしますか?)	38	
8	6/23	附属によるオリエンテーション2 (附属幼稚園・附属小学校)	附属幼稚園・ 附属小学校実 習部 /K	附属小学校・幼稚園の話 を聞いての感想	38	
9~ 13	6/30 ~ 7/6	「学校教育実習」(写真2~7) 後、大学に帰り、グループに分か れたディスカッション、記録整理	MO/HA /K/M/TK/H	7/6に「学校教育実習」 で学んだことをテーマに1 分間スピーチ	5つ	グループをさら に細分化し、 5名程度のグ ループで実施。 毎日司会、記 録を交代する。
14	7/14	「学校教育実習」で学んだことを テーマに1分間スピーチ(グループ ごと)	MO/HA /K/M/TK/H	まとめのワークシートを記 入	38	写真8
15	7/21	まとめ 今後の学校教育実習の流れと専攻の 決定について解説	MO/HA /K/M/TK/H	ポートフォリオをまとめ、 月 日までに提出	38	写真9

MO: 森本 HA: 秦 K: 川路 TK: 高旗 M: 間瀬 H: 平野

下線教員はその時間の主たる講義運営者

表2 2004年度 参観ローテーション表 1クラス...39~40名

	6/30 水曜日	7/1 木曜日	7/2 金曜日	7/5 月曜日	7/6 火曜日
附属幼稚園(4学級)	A	E	D	C	B
附属小学校(12学級)	B	A	E	D	C
	C	B	A	E	D
附属中学校(12学級)	D	C	B	A	E
	E	D	C	B	A

学級配当の方法：5クラス(A～E)をさらに4グループに細分し、下記のような方法で学級配当を行う。
(また授業協議は1グループをさらに、の2チームに分ける)

表3 2004年度 学級配当表

		6/30	7/1	7/2	7/5	7/6
附属幼稚園	たんぽぽ	A 1	E 1	D 1	C 1	B 1
	さくら	A 2	E 2	D 2	C 2	B 2
	つき	A 3	E 3	D 3	C 3	B 3
	ほし	A 4	E 4	D 4	C 4	B 4
附属小学校	1 - 1		A 1	A 1		
	1 - 2		A 2	A 2		
	2 - 1		A 3	A 3		
	2 - 2		A 4	A 4		
	3 - 1	B 1	B 1		D 1	D 1
	3 - 2	B 2	B 2		D 2	D 2
	4 - 1	B 3	B 3		D 3	D 3
	4 - 2	B 4	B 4		D 4	D 4
	5 - 1	C 1		E 1	E 1	C 1
	5 - 2	C 2		E 2	E 2	C 2
	6 - 1	C 3		E 3	E 3	C 3
6 - 2	C 4		E 4	E 4	C 4	
附属中学校	1 - 1	D 1	D 1		A 1	A 1
	1 - 2	D 2	D 2		A 2	A 2
	1 - 3	D 3	D 3		A 3	A 3
	1 - 4	D 4	D 4		A 4	A 4
	2 - 1	E 1		B 1	B 1	E 1
	2 - 2	E 2		B 2	B 2	E 2
	2 - 3	E 3		B 3	B 3	E 3
	2 - 4	E 4		B 4	B 4	E 4
	3 - 1		C 1	C 1		
	3 - 2		C 2	C 2		
	3 - 3		C 3	C 3		
	3 - 4		C 4	C 4		

表4 2004年度 各附属学校園における日程表

附属幼稚園参観日の活動 (実習3時間+2時間) 服装:スーツ 上履き 外履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~9:00	諸注意
9:00~11:30	保育参観
11:30	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30	各チームで保育について協議
協議終了後~16:10	保育記録の整理 ワークシートの記入
附属小学校参観日の活動 (実習4時間+2時間) 服装:スーツ 上履き 外履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~9:00	諸注意
9:00~12:30	授業参観 (初日は配当学級で必ず自己紹介スピーチを行う)
	業間休憩には子どもとコミュニケーションをとる
12:40	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30	各チームで参観した授業から一つを選び協議 (司会と記録は毎回交代)
協議終了後~16:10	授業記録の整理 ワークシートの記入
附属中学校参観日の活動 (実習4時間+2時間) 服装:スーツ 上履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~9:00	諸注意
9:00~12:40	授業参観 (初日は配当学級で必ず自己紹介スピーチを行う)
12:50	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30	各チームで参観した授業から一つを選び協議 (司会と記録は毎回交代)
協議終了後~16:10	授業記録の整理 ワークシートの記入

・ 附属学校園の教員に対する調査の概要

前章で報告した「学校教育実践研究」及び「学校教育実習」を実施後、下記のような質問事項で附属学校園の教員に対して意識調査を行った。

1. 5件法による教員意識調査の分析結果

今回の実習の概要・実施方法について7項目、今回の実習の内容について11項目、今後の教育実習全体について9項目の設問を用意し、それぞれに関する意識について回答を求めた。設問項目の詳細は表1に示す通りである。なお、回答に当たっては、表2に示す尺度を提示したうえで最も当てはまるものを一つ選択させた。質問紙の回収数は幼稚園で6名分、小学校で15名分、中学校で12名分の合計33名分であった。

表 5 5 件法による教員意識調査：質問項目 (27項目)

質 問 事 項	
今回の実習の概要・実施方法について	1 今回の実習についてその目的・意義を教員間で共有されていた。
	2 今回の実習の実施方法・内容（日程や参観人数、授業参観の方法など）を把握していた。
	3 実施時期（6/30～7/6）は適切であった。
	4 実施日数（5日間）は適切であった。
	5 参観時間（幼稚園3時間、小・中学校4時間）は適切であった。
	6 実施期間中、土日曜日ははさんだ事は適切であった。
	7 幼稚園、小学校、中学校の全ての校種を体験することは適切であった。
今回の実習の内容について	8 学生の朝の自己紹介は必要だった。
	9 1年次に実際の授業（保育）記録をとるという実習は適切であった。
	10 各学級担当された学生数（8～10人）は適切だった。
	11 学生の授業（保育）参観する態度・様子は適切だった。
	12 学生の服装や髪型、礼儀作法（挨拶など）は適切であった。
	13 学生は熱心に授業（保育）を観察し、記録をとっていた。
	14 参観するスペースが少なく、授業（保育）に支障が生じた。
	15 学生が児童・生徒とコミュニケーションをとる時間がもっと必要であった。
	16 授業（保育）参観後の授業者を交えた協議やコミュニケーションをとる時間があると良かった。
	17 学生への授業公開において、普段通りの授業（保育）を行うように努めた。
	18 学生への授業公開において、内容や進め方について考えて授業（保育）を行った。
今後の教育実習全体について	19 1年生で教育実習を行うことは必要である。
	20 1年次に附属学校園での実際の授業（保育）を観察することは必要であった。
	21 「学校教育実習」は学生の教職意識の向上に意義がある。
	22 今回の「学校教育実習」によって1年生の附属学校園への親近感が高まる。
	23 今回の「学校教育実習」によって附属学校園の存在意義が高まる。
	24 今後、日常的に授業・保育参観が行われることによって教師教育が向上すると考える。
	25 専攻が定まっていない段階で授業（保育）を観察することは適切である。
	26 今後、学生が授業参観を行う際には授業内容を配慮する必要がある。
	27 大学で行われる事前事後指導に自分も一教員として参加したい。

表 6 5 件法による教員意識調査：使用した5段階尺度

非常に良くあてはまる	良くあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
5	4	3	2	1

1) 回答平均値による各学校園の回答傾向

表 3 は、各質問項目での全体集団及び学校園別集団における回答の平均値、標準偏差、度数（各設問毎の回答数）と、各学校園間で平均値の差の検定（t 検定）を行った結果を示している。この表で示される値や検定結果から、各学校園の教員の意識に関して次に示すようなことが窺える。

表7 5件法による教員意識調査：回答平均値及び各学校園間での平均値の差の決定

	質問事項	全 体			幼 稚 園			小 学 校			中 学 校			平均値の差の検定		
		Ave.	S.D.	N	Ave.	S.D.	N	Ave.	S.D.	N	Ave.	S.D.	N	幼・小	小・中	幼・中
今回の実習の概要・実施方法について	1 実習目的・意義の教員間共有	3.42	0.79	33	3.83	0.75	6	3.00	0.65	15	3.75	0.75	12	*	*	
	2 実習の実施方法・内容把握	3.70	0.88	33	4.50	0.84	6	3.33	0.82	15	3.75	0.75	12	**		
	3 実施時期の適切さ	2.85	0.94	33	3.67	0.82	6	2.47	0.92	15	2.92	0.79	12	*		
	4 実施日数の適切さ	2.97	0.68	33	3.00	0.63	6	2.87	0.83	15	3.08	0.51	12			
	5 参観時間の適切さ	3.15	0.76	33	3.83	0.75	6	3.00	0.76	15	3.00	0.60	12	*		*
	6 土日をはさんだ事の適切さ	3.27	0.84	33	4.00	1.10	6	3.00	0.65	15	3.25	0.75	12	*		
	7 全校種の体験の適切さ	4.21	0.60	33	4.17	0.75	6	4.20	0.68	15	4.25	0.45	12			
今回の実習の内容について	8 学生の自己紹介の必要性	2.81	1.18	27	2.00	0.00	2	3.14	1.35	14	2.55	0.93	11	**		
	9 1年次授業記録実習の適切さ	3.77	0.82	30	4.25	0.50	4	3.71	0.83	14	3.67	0.89	12			
	10 各学級配当学生数の適切さ	2.20	0.85	30	2.75	0.50	4	2.29	0.83	14	1.92	0.90	12			
	11 学生の参観態度・様子の適切さ	2.97	0.93	30	3.60	0.55	5	3.00	1.00	13	2.67	0.89	12			*
	12 学生の身なり、礼儀の適切さ	3.19	0.95	31	4.20	0.45	5	3.29	0.83	14	2.67	0.89	12	**		**
	13 学生の授業観察記録の熱心さ	3.21	0.86	29	4.25	0.50	4	3.23	0.60	13	2.83	0.94	12	**		*
	14 参観スペース狭小さによる支障	3.17	0.97	29	2.50	0.58	4	2.85	0.90	13	3.75	0.87	12		*	*
	15 児童生徒との対話時間の必要性	3.23	1.04	30	2.75	0.96	4	3.57	0.85	14	3.00	1.21	12			
	16 参観後の教員との協議の必要性	3.48	1.09	29	3.75	0.50	4	3.92	0.76	13	2.92	1.31	12		*	
	17 普段通りの授業の公開を実施	4.03	0.78	29	4.50	0.58	4	4.08	0.49	13	3.83	1.03	12			
18 内容・進め方に配慮の授業実施	2.93	0.96	29	3.00	0.82	4	3.31	0.85	13	2.50	1.00	12		*		
今後の教育実習全体について	19 1年次教育実習の必要性	3.55	0.87	33	3.17	0.75	6	3.53	0.83	15	3.75	0.97	12			
	20 1年次に附属学校園授業観察の必要性	3.82	0.73	33	3.83	0.75	6	3.87	0.52	15	3.75	0.97	12			
	21 「実習」による教職意識の向上の意義	3.79	0.78	33	4.00	0.63	6	3.73	0.80	15	3.75	0.87	12			
	22 「実習」による附属への親近感向上	3.18	0.81	33	4.00	0.63	6	3.00	0.76	15	3.00	0.74	12	**		*
	23 「実習」による附属の存在意義向上	3.42	0.97	33	3.67	0.82	6	3.40	0.99	15	3.33	1.07	12			
	24 日常的授業参観による教師教育の向上	3.27	0.88	33	3.17	0.41	6	3.53	0.83	15	3.00	1.04	12			
	25 専攻未定時での授業観察の適切さ	3.45	0.67	33	3.83	0.75	6	3.47	0.64	15	3.25	0.62	12			
	26 授業参観時の授業内容配慮の必要性	2.84	0.95	32	3.20	0.84	5	3.00	1.00	15	2.50	0.90	12			
	27 大学での事前事後指導への教員参加	3.13	0.98	32	3.20	1.10	5	3.20	0.94	15	3.00	1.04	12			

「平均値の差の検定 (t検定)」欄の記号の意味 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

a. 「学校教育実習」に対するプラスイメージ・マイナスイメージ

平均値が4（良くあてはまる）を越えている質問項目は、その内容に対して教員がプラスイメージを持っていると考えることができる。学校園別に捉えると次の通りである。

幼稚園	Q 2、Q 6、Q 7、Q 9、Q 12、Q 13、Q 17、Q 21、Q 22
小学校	Q 7、Q 17
中学校	Q 7

幼稚園教員で多くの項目があがっているのに対して、小・中学校教員ではあげられる項目が少ない。複数の学校園であげられる項目としては、Q 7 「全校種の体験の適切さ」、Q 17 「普段通りの授業の公開を実施」であり、この2点においては実習プログラムの理解が得られたことがわかる。

また、平均値が中央値である3を下回っている質問項目は、その内容に対して教員がマイナスイメージを持っていることを反映している。学校園別に捉えると次の通りである。

幼稚園	Q 8、Q 10、	Q 14、Q 15
小学校	Q 3、Q 4、Q 10、	Q 14
中学校	Q 3、Q 8、Q 10*、Q 11、Q 12、Q 13、	Q 16、Q 18、Q 26
* 中学校のQ 10は2未満の値を示した		

幼稚園・小学校教員の4項目に対して、中学校教員では9項目が該当した。複数の学校園からあげられる項目としてはQ 3 「実施時期の適切さ」、Q 8 「学生の自己紹介の必要性」、Q 10 「各学年配当学生数の適切さ」、Q 14 「参観スペース狭小さによる支障」があった。特に、中学校におけるQ 10の回答平均値は2（あまりあてはまらない）を下回っており、190名近い学生一斉による教育実習実施のために起こる配当数と教室環境との不適合が問題となった。また、中学校で「学生の参観態度」「授業内容設定」が問題としてあげられているが、幼稚園・小学校からはあまりあげられていないことを踏まえると、校種間で教育実習に対する教員の意識や構えに大きな違いがあることが考えられる。

b. 平均値の差の検定で捉えた校種間での教員意識の違い

各学校園間の平均値の差の検定を行った結果から、校種間で教員意識の違いを比較整理したものが表4である。

表8 5件法による教員意識調査：校種間平均値比較

平均値の関係 低い 高い	校種間での違いの解釈	該当質問項目
幼・小<中	(幼・小)と中との間で有意な違いが見られる	Q 14
小<中・幼	小と(中・幼)との間で有意な違いが見られる	Q 1
< 小・中・幼	小と幼との間のみ有意な違いが見られる	Q 2、Q 3、Q 6、Q 8
< 中・幼・小	中と小との間のみ有意な違いが見られる	Q 16、Q 18
< 中・小・幼	中と幼との間のみ有意な違いが見られる	Q 11
中・小<幼	(中・小)と幼との間で有意な違いが見られる	Q 5、Q 12、Q 13、Q 22

「平均値の関係」欄の「<」は有意差の存在を示す

この内容を踏まえた場合、各学校園の教員意識として次のようなものがあるように感じられる。

幼稚園：実習に関して学部との連携に配慮がなされており、実習を行った学生に対して好印象を示していた。

小学校：事前の準備段階において教員間での実施に関わる連絡や学部との連携への配慮はあまり力点を置いていないが、実習時の学生への指導に関しては意欲的な態度を示していた。

中学校：学校のキャパシティの関係から、実習の実施形態や学生の態度等に関して批判が多かった。実習時における指導や配慮は、あまり積極的な態度を示していなかった。

2. 自由記述による教員意識調査の分析結果

附属学校園に対して調査したアンケート（自由記述）から学校園教員の意識と実習に対する現場サイドからの問題提起が寄せられた。

実施時期の問題

6月末から7月初旬という実施時期について「早すぎる」、「2学期（後期）が良い」、「もっと長期にわたって実施する」等の意見があった。

大学側としては今回の改組によりこれまで以上に教職志向の高い学生が入学していると考えている。そうした学生の志向をより高めるために前期での実施は必要不可欠である。また通常の講義実施中に行うため、長期にわたって実施することにより教養の講義を一定数の学生が恒常的に欠席することとなり、大学教育に問題を生じさせることとなる。長期にわたっての実習、授業参観は2年次に実施される「学校教育実習」で対応することになる。

実施方法について

一日4時間の参観に対して大学生の精神的・肉体的負担と幼稚園児から中学生までのストレスについての言及があった。また教室の空間的な問題から「各学級への学生配当数が多すぎる」「5、6名程度が適当」という意見が出た。物理的な制限はあるが、人数の問題は改善できる内容と判断できる。

実習の内容について

1年次での現場体験に対する意義に対して理解はあったが、「学生の意識・態度（常識がない、あいさつできない、疲れている、積極性がない）」に対する厳しい意見が多く挙げられた。これらの学生への注文は常に聞かれるものであり、特に1年生に対して限ったことではない。学生に対する指導はもちろん必要であるが、附属学校園教員への学生に対する姿勢（まなざし）について理解を求める必要がある。

他に参観方法について「授業記録を中心とした実習よりも、子どもとの触れ合い体験を重視して欲しい」という意見もあった。子どもとの触れあい体験を軽視しているのではなく、それだけを重視したこれまでの実習体系を変革し、試みている実習であることを今後も説明していく必要がある。また「子どもとの触れ合い体験」は基礎体験領域でも行われていることであり、

本実習のねらいはそれとは異なる。

「学校教育実習」全体について

学部の新しい試みとして期待する声や、授業を見る力と子どもを知るといふ2つの側面に関するコメントが多かった。「学生の感想を知りたい」という意見もあり、後日各附属学校園に対して本年度の「学校教育実習」に関する成果の報告会を実施した。

4年間の教育実習全体について

「附属の負担が大きくなるため、学校行事の調整を図ることが必要」という意見があった。この問題は今後の教育実習系カリキュラムだけではなく、附属学校園の改革に伴う大きな問題点となるであろう。

附属学校園からの意見には、厳しいものが多い。厳しい勤務状況の中、新たな実習が付加されることによる負担感の増大を危惧する声が多く出された。1年次にこうした実習の必要性を見いだせないと言う意見もあったが、これまでと異なった新しい試みであるからこそ、学生の変化によってその必要性を実感して欲しいと願っている。またこの実習を行ったことによって身に付く能力を明確にという意見もあった。1年次からの継続的、恒常的な教育実習カリキュラムにおいては、学生に安心して学校教育実習体験ができる場を保証する必要がある。その為にも教育実習の在り方を検討するためには学部と学生、そして附属学校園とそこで学ぶ児童・生徒、それぞれが有益と感じられることが必要となる。

・来年度の「学校教育実践研究 ・学校教育実習」の実施計画案

1. 来年度に向けての改善点

本年度の「学校教育実践研究1」、「学校教育実習」の実施に伴って幾つもの問題点、改善しなければならぬ点が浮かび上がってきた。学生からと附属学校園の教員からのアンケートを参考にしながら下記のような来年度の「学校教育実践研究1」、「学校教育実習」の実施計画(案)を提出する。

改善点としての提案

各クラスを6つのチームに分ける事により、配当学生数を9~10名から6名程度に縮小できる。

チーム数を増やす事により全学級(附属幼稚園いちご組を除く)に配当する。

それによって各学校において異学年の授業参観を行う事とする。

授業参観については4時間行っていたものを2時間(1・3時限目)にし、各授業後授業協議を控室で行う。(幼稚園の場合は別に行う)

自己紹介については全体の初日のみに行う。2日目以降は学級が変わっても行わない。また自己紹介の内容については「学校教育実践研究」で重点的に指導する。

参観実習後、大学においては授業協議の続き、あるいはその内容をレポートとしてまとめる活動を行う。

附属小学校においてはできる限り業間休憩中に子どもと触れあえる機会を設ける。
 参観する授業については参観時限を設定する事により、参観に相応しいもの（テスト返却や
 面談テスト等ではない）授業を計画する。

2. 平成17年度の学校教育実習1の内容（案）

- ・内容：附属学校園を場とし、幼稚園（1日）、小学校（2日）、中学校（2日）各4時間の計5日間（20時間）の観察参加実習を行う。
- ・期間：6月29日（水）～7月5日（火）
- ・実施方法：1年生（171名）及び2年生の体験時間未認定者を5クラス（A～E）に編成。下記の表のようなローテーションを組み、8時30分～13時ごろまでの間、各学級に配当し授業（保育）観察と児童・生徒とのコミュニケーションを図る。

表9 2005年度「学校教育実践研究」のプログラム

	月/日	内 容	宿 題
1	4/13	・1000時間体験学修のオリエンテーション ・ポートフォリオ、ワークシート、宿題の説明	自己紹介スピーチ（1分間）
2	4/20	・自己紹介スピーチ1	小学校低学年、高学年、中学生向けの自己紹介スピーチ
3	4/27	・自己紹介スピーチ2	教育学部を受験した理由 心に残っている授業
4	5/18	・授業観察1（一斉指導1） ・授業協議とは	心に残っている国語の授業
5	5/25 （水）	・授業観察2（一斉指導2） ・教官による授業協議	教官による授業協議を聞いて、自分の考えや気づいたことをまとめる
6	6/1	・授業観察3（一斉指導3） ・学生間による授業協議	自分たちで行った授業協議の中で、自分の考えと異なる点や気づいたことをまとめる
7	6/8	・授業観察4（個別指導）	「附属中学校からの宿題」（こんなとき、あなたは どうしますか？）
8	6/15	・附属によるオリエンテーション1（中学校） ・教育実習での諸注意	「附属小学校」「幼稚園からの宿題」（こんなとき、あなたは どうしますか？）
9	6/22	・附属によるオリエンテーション2（幼・小学校） ・「学校教育実習」の日程説明	「学校教育実習」に向けての諸準備
10 ～ 14	6/29 ～ 7/5	・「学校教育実習」終了後、大学に帰り、グループに分かれてのディスカッション、記録整理並びに報告書の作成。 附属幼稚園：1日、附属小学校：2日 附属中学校：2日の保育・授業参観。 ・授業観察をふりかえる ・一日のまとめ	「学校教育実習」で学んだことをテーマに1分間スピーチ 授業の記録はワークシートの後ろにある用紙を利用する。
15	7/13	・「学校教育実習」で学んだことをテーマに1分間スピーチ（グループごと）	「学校教育実践研究」を振り返って
16	7/20	・各グループ代表による発表 ・まとめと最終連絡 ・今後の「学校教育実習の流れ」と「専攻の決定」について解説	ポートフォリオ（提出： 月 日） アンケート調査：別紙（提出： 月 日）

表10 参観ローテーション表 1クラス...36名

	6/29 水曜日	6/30 木曜日	7/1 金曜日	7/4 月曜日	7/5 火曜日
附属幼稚園(4学級)	A	E	D	C	B
附属小学校(12学級)	B	A	E	D	C
	C	B	A	E	D
附属中学校(12学級)	D	C	B	A	E
	E	D	C	B	A

学級配当の方法：5クラス(A～E)をさらに4グループに細分し、下記のような方法で学級配当を行う。

表11 学級配当表

		6/29	6/30	7/1	7/4	7/5
附属幼稚園	たんぽぽ	A 1 + A 2	E 1 + E 2	D 1 + D 2	C 1 + C 2	B 1 + B 2
	さくら	A 2 + A 3	E 2 + E 3	D 2 + D 3	C 2 + C 3	B 2 + B 3
	つき	A 4 + A 5	E 4 + E 5	D 4 + D 5	C 4 + C 5	B 4 + B 5
	ほし	A 5 + A 6	E 5 + E 6	D 5 + D 6	C 5 + C 6	B 5 + B 6
附属小学校	1 - 1	B 1	A 1	E 1	D 1	C 1
	1 - 2	B 2	A 2	E 2	D 2	C 2
	2 - 1	B 3	A 3	E 3	D 3	C 3
	2 - 2	B 4	A 4	E 4	D 4	C 4
	3 - 1	B 5	A 5	E 5	D 5	C 5
	3 - 2	B 6	A 6	E 6	D 6	C 6
	4 - 1	C 1	B 1	A 1	E 1	D 1
	4 - 2	C 2	B 2	A 2	E 2	D 2
	5 - 1	C 3	B 3	A 3	E 3	D 3
	5 - 2	C 4	B 4	A 4	E 4	D 4
附属中学校	6 - 1	C 5	B 5	A 5	E 5	D 5
	6 - 2	C 6	B 6	A 6	E 6	D 6
	1 - 1	D 1	C 1	B 1	A 1	E 1
	1 - 2	D 2	C 2	B 2	A 2	E 2
	1 - 3	D 3	C 3	B 3	A 3	E 3
	1 - 4	D 4	C 4	B 4	A 4	E 4
	2 - 1	D 5	C 5	B 5	A 5	E 5
	2 - 2	D 6	C 6	B 6	A 6	E 6
	2 - 3	E 1	D 1	C 1	B 1	A 1
	2 - 4	E 2	D 2	C 2	B 2	A 2
	3 - 1	E 3	D 3	C 3	B 3	A 3
	3 - 2	E 4	D 4	C 4	B 4	A 4
3 - 3	E 5	D 5	C 5	B 5	A 5	
3 - 4	E 6	D 6	C 6	B 6	A 6	

、 は各クラスを二分し、配当。

表12 2005年度 各附属学校園における日程表

附属幼稚園参観日の活動 (実習3時間+2時間) 服装：スーツ 上履き 外履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~9:00	諸注意
9:00~10:00	グループでの保育参観
10:00~11:00	個別での保育参観
11:00~11:30	参観について協議
11:30	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30ごろ	協議の結果をレポートにまとめる
レポートまとめ終了後~16:00	保育記録の整理 ワークシートの記入
附属小学校参観日の活動 (観察実習2時間+協議2時間+実践研究2時間) 服装：スーツ 上履き 外履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~8:50	諸注意
8:50~9:00	朝の会参加 (初日のみ配当学級で必ず自己紹介スピーチを行う)
1時限目	授業参観
2時限目	1時限目の授業について協議 (司会は毎回交代)
業間休憩	子どもとコミュニケーションをとる
3時限目	授業参観
4時限目	3時限目の授業について協議 (司会は毎回交代)
12:40	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30ごろ	各チームで2つの参観授業から一つを選び、協議の結果をレポートにまとめる
レポートまとめ終了後~16:00	授業記録の整理 ワークシートの記入
附属中学校参観日の活動 (観察実習2時間+協議2時間+実践研究2時間) 服装：スーツ 上履き	
8:40	集合 出欠確認
8:45~8:50	諸注意
8:50~9:00	朝礼に参加 (初日のみ配当学級で必ず自己紹介スピーチを行う)
1時限目	授業参観
2時限目	1時限目の授業について協議 (司会は毎回交代)
3時限目	授業参観
4時限目	3時限目の授業について協議 (司会は毎回交代)
12:50	集合 解散
14:30	大学集合 出欠
14:30~15:30ごろ	各チームで2つの参観授業から一つを選び、協議の結果をレポートにまとめる
レポートまとめ終了後~16:00	授業記録の整理 ワークシートの記入

附属小学校の校舎改築により学生控室などのスペースが確保できない状況にあり、平成17年度に限っては1、2時限目を授業参観し、3、4時限目は大学の空き教室を使用して授業協議を実施する。

． おわりに

本稿は新しい教育実習の在り方を模索する過程に生み出されたものである。それは未だ過程であって完成年度に向けて一つ一つ実行に移さなければならないものである。平成17年度は、この「学校教育実践研究 ・ 学校教育実習 」を体験した学生が2年生になり、「学校教育実習 」を体験する年度となる。この1年次での体験が彼ら・彼女らの教職志向と教職スキルを高めるものとして、また今後さらに高度化していく実習への基礎的能力を養うものとして改善していく必要がある。

教員養成に特化した学部として教育実習の改革、カリキュラムの内容充実、実習体験とその基盤となる大学講義の関係性等、課題は山積しているが、本稿はその第一歩として位置付くものとする。



写真1：＜間瀬先生による授業VTRを使った授業記録の取り方＞



写真2：＜附属幼稚園での保育参観の様子＞



写真3：＜附属小学校での朝の会自己紹介の様子＞



写真4：＜附属小学校での体育（水泳）授業参観の様子＞



写真 5 : < 附属小学校での業間休憩の様子 >



写真 6 : < 附属中学校での朝礼自己紹介の様子 >



写真 7 : < 附属中学校での授業参観の様子 >



写真 8 : < 授業参観後、大学でまとめの意見発表 >



写真 9 : < 全体を前に各クラス代表が意見発表 >